楊柳園千句

伊地知文庫
文庫20
118

安永二年七月

伊地知氏書冊

立
山何

ミねのこの道ある末も見えこの秋　昌周
若枝しるき陽の影の松
つくの田川のあさ霧晴て
船の名も山の所々ぬめり
猿もゝや麓にの一人乃来鳴
比まるそで雉の声も社これ
白露のかゝ也を寄て深月ま
うつる森の枕穂風なるかく

潁原文庫

文庫20
118

菖蒲ぐ人紅さくも備して
雨ふれば小窓の小海船
あましめも水底の鵜も漂ひ
河の本ゐ山村あそまの第
夕陽の入日汁さふ降りて
十市の里にそく小行くの子
見つまてもたれの峯の下人蛙
宇治ふとゝまん泥亀やや
多くても化る水に滝の音
やましくまれと満つ虫の声
雪の肩いさしの枝のれも
あられ降る小言まの色
一本より咲そ縁さ花の実
秋くれ小洲し庭の 翁

あやあむめや ひよ近ふいさとの月
竹の本来の道をもたくくし
以津しのき舟ゆく小松哉
住そあやしまなみの山寺
松さえも花の雲を書かき
意の世之る内の戦ひの元
菖の春ふの根るのに存守て
名しき色も潤くとすうちふ
若の日の月をいつす窓の庭
や路を見しむの女自ゐ
村井の経る深来好
つるかや代のたゝみゝとし字
明き水鶏橘の花陰
秋草の咲つらく一笑舎の来

むしろの霜に介の跡をさへ
すゑにゆくへの見えぬみやこ
あはれの結ぶに中々袖の上露
こゝろみるにも比つきせぬ
思ひさし旅の枕の夢現
うつゝの山風夜なに吹こゆ
川水やまたとまれて流るゝ
かけてそとほ春のまた
入相の音鐘もれもさそ
昨日は今日を舟に月を聞きて
ときは国ふ心清く林を見
隔まふ見の来る紀言
見えかたる又きの色さる
浮きぬと消の浮

小舟の見くる時雨の折〻のみ
色紙し小蝶脚をえよりたれ
咲柳すゑ尾のこゝろの色そ
開きは淀し松の下風
世のみ尾る尾やあとし
入りて紀らはに流のこゝろ
もとよりの浮え絵にて
和をとへ人の心ひとつよ
すゑ歌り木国風の野路
雑の音 梅の初花
冒も咲るもしてよ調ゑ
園田の少女は浮まし
桐の下行水の月数り
蕭ほのかにまつひとし

ここもある事より高野を経て
今はいれすいりつを侍りし
郷に新田人あるが山なるを
鈴やのしょうえ収離あり
古郷の夢ハ御やしの音なきを
まつの花りん言もえんかのし
あ宇へ半峯の花かなせ
ましたのこみ夷ハ年り
御佛の古ちあや陽の花
うち初との月の花春も
あの小さみ花も草まくら
雁の行頭の遠くよふ
紀路の一ヶ手の俳の
果の道枕きさいら

旅衣のうら何をかくして
楼森にみゆる遠の一村
足引の山や伊勢の
路はまた暮るままにあらけ
花橘し田舎の権行なるて
袖にもちつまる秋のこのもと人
今の人うち継の出家の物
さらしの里の音せのともす
小舟を此の松が出る間にの中
更行月や水にて銀にある
浪のことを千の扉も秋の
ましてなるより更に
野のの紹の細しれや旦
こそもれハ深きものよりさ

春もゝや柳の露に花靉
高のよひ一露も気まし
らかしさい蛙も奔り蟷螂の花咲
深山の秋ちりしと紅葉しよ
まゝ浜に人間も草も枯果て
高まあつさの訪る道の色
肩まで思ひきしまふんや思ほえん
いつ能色乃深くも見えつ代

其二

何人

梅見

呂陽

松竹氷河山流の角
照月の春も谷川の高
為雅ろ雲にとや訓て
梅見行くまの朱のもしく
うつろ梅寸間旬の春やまとの
暮てもありの彩も流きろ
風ゆ津も何雨も流の松の雪
まゝ此ゝ根の多春にある紅

猶のまる瓜生の遠やらゑん
さゝのまふれ俺しさし
うきみのを遁れつる世のありさま
おゐを予しの花ちらぬ
あきまふ秋ふ向ひまへの歯
ちぬ秋傷て月ヶ要める
山寺の雁とその影に早寄ほし
家の扉の秀をる行帰れ
新月の梅の風にのうすい雅や
旅の夢もりぬこゝ夢の上
須の色乃のきしへのこた月の色
誰の待ちあん錦寄のゝ
いまと秋毛のしれ小寛ふ其縁
なをさへやまふぬ涙とそしれ

うくまても天の恵ゟ任原て
山をも一きいまして人の
九とくり比丹を書面思ひん人
やすい山隠りいんするとり物
さの道風の深の鏡してかし
那離める関の文
吹風のすきる寄の解魂
こゝますゝ雨始もあをの一節
遠の細山頭の待り春の海
この身の乗そのゝもきへ江の舟
入方の月往路のかり帰られ
梅きたるや音紀神の影
下水のこゝ佛まち木の蘿さそて
濃むらの室水雨え阿しな枝

まのしるとかりいたの小部ふ
是いさしきの花のえの重さ
いくまもるん甲児渺ら心ふ
乳るよのかくる測断ともえまよ
さけいきさら左ら丁衣の佐哉
当中の座くみとまりのりきん
風まらし雪ふ吹行汀まム
やとりありたり旅のくし手
只さすけ一村なのめてまえて
つきまある君ふみ高り深しも
虫の音やなえ色あり絶遠忘
つくら笛の秋出帰てくと
とまふ住居の内ぶ錦すて
左ふきらん体の途しさ

白雨のきよら当乳ると乃絶
ありる布小なりく小笹さの井
うつきよ旅路の際みその峡
人のかりの行来こうき
雨すてやよつありのそいる道
現まえ左川蒼の南の御帝
明ゐるよるの岳すゑあ気て
其い深くもなすもし松の声
山里や鳥き雛巣くしやん
いそのいつき小けの道路
一葉みなりのくいの草の下り乱
屋庵の徳絶て附し参り
いら世帝のひよわる月のいの庭人
亡きをいのさとてなつこき然

住吉さまの名も高砂と思ひや
ろうと根のふかりとやん
是由良の湊を海つらに家路に
洞猩の神の宮居あら
踊すゝむあのつき趣に朝夜
暗仏も月もすむ路心
夕暮れ松の本宮の御ひかりかれて
高島も猿ゝの宮や傳人
まいて大平ますら比叡の神酒
むもの事見たり山やの宮和
日吉の御子の橋の縁より
ひしま寺参る八王子の先見帯
苗代の水とや西宮に垂れん
くはるゝ里の未の太夫

梓弓たゞ名の山ゆきなかれて
あゝこれしなのさのるとれ過ん
是深すまねの宮に古の深
いつやらも男胝の月
暁きもろ手をほえの柔和で
とむるもあはれなき秘
心も雨あはれ思ひぬ信施
またうちすいやすさもいつき
あられて住いる山も沢の下て
錦鈍く錦子の宮の郡とも
道蔵の高きも清人夕日影
松は八千代の喜風の音
水際に宮の竹の長閑さ
あゝも玉藻神なゝし

郭いるも西の国をさとの絶
なく終つくしの月出しくそ
催見の催根をや独すん
忘れのことの宿の横雲
花もこ菊笑る浪なり海與や
結ぶの袂風色をとし
さん友鬼故など龍明乾
我ふありましんを也れ

廿三

朝何

花咲けり　世を去る事は色もなし　昆周

雲もなきの遠道の山
乗り馬の宿路を乗の乾越て
定まる事や水とらん
そのゆきも百年の宿のこ
旅宿の枕野にはいつまし
いつその月よ小判草もなし
麻の鳴るの儚しよふ

山田守神ともや高田の他なん
高根をこしの風さきさきて
田をの大ふる積の雪
とくきこえきし春の出まき
若きしれとかきのにふて
りふり梅の香りちるこのみ
行来やをしむも早き道明
霞みのれて花瓶つなく
彩るよ蛙鳴すふ秋ね
月ふあすりの涙りめね
大とし此村分ても秋となし
起きての郎しと高きての郎も
端す色文心まま高もあし声
その本つしする道と往しれ

とめ今や緑の出たる山みえん
異なる杭雪の花のふぬれて
冬の田まし花見梅松とて
来ん緑や野の帰むり
鴨のつる初雪の流
篠火の花なかくしく笑
草むらくまる田中の道絶
去れ妬るのちのこの流の宿
あまて帰路足みをまとふ
根のにの花玉の紅添し
うつろや酒の色の花 衣
ちるみさま春まの杜宇れ
月のすむ北の風の吹出て
いつをも毎のと隔とさえん

沖津波ハ高師の浜の暮没り
雨もよひ舟さしもゆくこの曲浦の名
他の経ても忘や涼のうん
来る人たとへはみけそうのし
他ままあをもひあや行九田波絶
見ろふるふ のこ隔のそこき
あくのうへ魂や笹のさゝふろん
草萌そへ世の世をまくれなり
呉竹のなまつ揺まりてれなる月
旅なるや御の雀色時
隔さへ山鶯深限をとの中
あくの小呂の里のあらぬの
木陰の灯細く更ておく
稲刈り小家の衾さ

鞍置しらん秋たのしめとん
こゝみ小原の滝すしもあれ
こゝの夢の津の花もまた絶れ 紀伊
隔てハ何のつらき曲 丈
送りて来こ深山閑のあ
香をとらて踏をみの夕風
梅一本ある白し宿も茶
いらしと開け晩 鳥
奈信をも空の晩て
山のなくく道ももし
誰のとふ行なる若竹涼こそ里
こゝもまた蛙涼をかめる
言ひこと野ハ里寺の内のさ橋り
きくふこるくも晴闇くなり

思ひ出し山吹の里を尋ねて
あすや新緑の松を見ん
ちとつる友社を見て此處
何事もなしにすゝみの好し
ますらをもたゞる清き情の有様
珍しのいさもみるとの道いのち
ちらふの竹八人の時すらん
ふかきさへ風あり帰りぬ
旅人の面を折し櫻花
さつきとめどの明の早蕨
昼に紅の東のかぶりつくして
也秋あふれかりの跡
虫の音の露を鳴の細の音ふ
秋深き草のつまれぬかなしき

うきよ見や花の露にも山の藤らん
そらの月雲の風を入てにくよ
坂無事のこゝにゑすゝに旅細き
柳まよふ川の流るるらん
猿曳て絶すめる海を小舟
まよ海河渚や雲居にくるを
泊の庵を荒らするふ頃で
今日よりふみて此山路
まつさそし旅ね好き露哀れ
浮世時のまの秋の風
我をしあはきくるる夢を舟路
いのふる露ちりきし桃の乃と
これぞ此松花をさこれる月も
すむ世こそのしきに折せ枕ぬる

村井の流(?)いつの中あさらかん
宗(?)郎くもりなる 松竹(?)の奥の道
[illegible]郎[illegible] 掬(?)まなきに[illegible]て
其の山寺の山風のまる
[illegible]おりく竹も見えて露の花
人の生まれの[illegible]まで二月
神ならぬ[illegible]郎の長閑かれ
いつくしこある國を流れる

第四

何路

山やまん(?)
花ふくまでも　鶯霞
底をのいつさ[illegible]郎公
時あれ花の[illegible]にふ胸[illegible]て
の[illegible]けし清流の末、
州(?)鄕(?)[illegible]の[illegible]村[illegible]
頂(?)の行道の遠く[illegible]
蓮(?)[illegible]晩(?)て[illegible]
とも[illegible]庵(?)の[illegible]

山崎に住まあゆのいの井
梅宮も涼き松の下陰
松の尾の庭の[illegible]の寺に鳴
嵯峨の大井の[illegible]の寺の[illegible]
嵯峨なりし神なや有に野々宮ん
広沢の[illegible]なるあけれ
とりれぬを請く住の宮の[illegible]
来てよれ[illegible]と掛け山
嵐とてやも[illegible]石の寺
鳴滝は[illegible]沖つ船人
いよふさん[illegible]風[illegible]なる字
ゆるさい時雨の空なきさき[illegible]
東寺と伏見の[illegible]施て
いまかて情なし一のこと[illegible]

先の宮も海よ[illegible]
名に[illegible]ぬ鶴なりつる[illegible]
高尾は[illegible]人のこころん
清滝[illegible]流るる塚
うく[illegible]しれもあ[illegible]
小野の山科松の下[illegible]
伏見の深草[illegible]
嵐の山桂秋ろ先くこそ
宇治をこの人定根の小笹[illegible]
淡路ぬあややする川波
漕連て舟はゆきみの宿[illegible]
帰る絶るはしの[illegible]黄
都の無さきを[illegible]の何の古
身をも無でも人乃[illegible]

以卿し雉を根のつまにゆや
こゝろの色を篭手しれけし
ちりぬるて何ぬ廻りの菊の花
雲ちの下丸内外夕風
来源をは渡わの船に種で置
旅に旅の見いとどうも駕し
京東注に茶の枝に茶もしら
志望の扉外の梨架垣
字然るしに引窓も世を隔て
多きしくわゆらん
思ひのこゝも妹宥に通りあるあやと
をしの心の示の字さに雲
四海なる松子楊ち吹降子
色しら亀梅の千本

唐衣きぬの心に神に請え
いらふのうらわたりこのゝ頃
ともしけり 路室の都の家
すゝみ来迷ひても世を隔つ
麿の差の山のまゝの証の
東きさらいや雪の 雪隠の月
ひとりんを見ゆるの竹し 不意快
字らときる風の竜
松の末をもうつろふ中やさき恋
あのいあらし 一天の橋
女のもとの方のみなと
更つ一夜の枕のうらみや
古卿の後源きそ 又も杉角理
にらむそのしのこそれぬらし

重良とゝもの為につかはし返
事とさのるをり　見への山見ん
思ひ別るゝ澄にさらす給
たちとくの夢なくの水しけり
雲雀帰りて未ぬも見夜
山のそらやのえ守とみさそ
水隠くれ流るゝ谷底
松あらわれ出來も早川
背向の跡ぬる数やさえぬらん
あらまほしくさき紛の末
細きのあそくは秘さし
しや国のさもあはあれ
別てさん有はゝいとはゝ留
庵訪しよ於のよるへ

何とし戦強にあるまじ侍従
重衡の北条しゝ主君の居
臥さぬとすし将は見てぬ森よ
あらし吹行るその空にき
再長く泪にぬれてんとよ
沈める海の波根之源氏沙汰
きの命なりふる深の内家へん
二度なくなきさ沈むの草
行程の流は維子の青あつれて
我あらの牡人より施れ
涙見とも齢をもたえさの跡
其のしはさきも字や世為
筆の別れとられはこそ
あらそ御る内の泉のよ

身に入んやいろの何うらん
むかしに風に秋をきゝつる
朝皃の一花ちらして
白浪の秋の末かな月の前
来なれば色なき袖の露し
山田の外や人のよふかん
岩本の紅葉にかゝる一夜道也
近しも涼むらむ人のあ

第五
花之何

雲林宗
うたゝね枕や部に
またもの山の月を経て秋
咲梅の匂ひ吹風に包まれて
雲晴たる斬のゆきく
来たる宵にて旋窓や網ふらん
うつり行月の来にて逢ふもさ
洪路一夜別れて朝旦
遠ふとおもふ旅人

雲のうら富山とやらん秋の霞
此あたり松の名所
錦に染やといふなりけん
ともかくに雨と名残し
木のはもちるも根の晴間て
袖の涸れしけるや乃由
麓の流れる蒲の神の跡
湖山寺にて紫の雪
舟の上の鐘を聞らん
かたりつゝ奥山の春
まことにや陸と海の夕霧
海の秋の川の中の末
読むべき杭は人ゝと
彦郷のその袖を秋の夜

ひとり見る夜の月のかげて
ゆかりの海辺生の秋
月のかたちのあるやまの酒
き、あるのか北の春
松のその渡るや流れの中の
葉をくゝ流れるを見て住むらん
立ちはかへり あの所
らん橋の杭をの花の下尾
川沿の末杭を住む黄昏に
雨やさらん夫の海の影
行舟もひとつ茅の渡る
蛙あり江静かなるにして
もとより此舟出ぬるや小鷺や
ゆめてはるとむかふらん山里

此ころはつかき秋世のはるされ
こゝろはへとゝまりえしやすゑ文
我もともに定家揚家の集を
瀧つ流を源しうつしに利
志るしみる拾遺の軒のなき
すりや西山の月を慕ふ森
風雅る筆のあとを庵明て
西山はまさに芭蕉林の山寄
翁人の神やたつねて拂ひ
去来も東の則段のみち
老僧鶴の味わらぬ洞
旅雅雄子や去来のん
山川蛙三色の友として
水の早瀬をたゆる虫の声

篠の揮揺儀し岩陰
昭りつゝあらいとあさされ
さらぬさとこそ帰らむ其の流し
淮も西の岩の流帰る
りふをまし二にも東都下る
あるのなすみのまつの山道
岩水とし絶え肉や宮あり
さるの彦いさる秋の味の流
まりとし香の三流東風吹
言ありうそろし大京の里
世なるとらして流そのあらん
已ふすけふさとろ帰郷
人毎のこのりろんの袖ささて
よもともあし読の抑ゝ

久方のくもゐにすみし月影や
神路の山の月よ長閑なる
さし添ふ松の緑のこなたに
いくとせ変らぬ松の色に
この秋の錦を着るもいとゝ
只今たつも鶯鳴てたえのし
いざとおとろ高あはも思ひのこして
むかしはかり人の行末
常にかはらぬ文あるる風あれは
あさん草口のきて咲中の色
思ひ絶の色をさあるる思ひて
聖人の光や此の松風
よろつよ君か代の末長く
行山寺の桐やくれ

深山のおのゝ藤衣の乱れ
峰の嵐をさそひ風の音
鶯のうたふ色をなれぬ見えして
いかのさかるの日すて筆取る
有明し秋ふかつの夜の秋
ちりつもりぬる 枕にし
深き小野の遠きの高き月の
ころ〳〵かけてこりそふ数く
色ある時雨降りの日の光
梢の松や風のおとつれ
花をちらす錦の山に
老の波よせくる山を
うちむるうくあきの松の尾
まつみをさく君の代しさ

見かえやの○きを今さし咲艶
さゝれやまさん言の玉札
秋となる水の音す○やこの隠ん
ゆうべあれとも月のくまなる之
猶つゝこゑ宮の山の陰ゆるゝ
君の手○のまあし久しき
いくあまの砂の松り出で
若菜のさ○ん嶋のくも衣

第六

何州

秋きあふれ
いふその月まつそえ花夜
袖のしきふ乃風のそよ吹て
花の落暮るま蝶や眠るかん
煙さのふの扉う行かるく
うすのかも氷の涙かきすて
山辺を深くあるまてゝ言
くもとめ見そ田畑の畦の時
下より門そかなゝ急くしん

椴いろも舎りなとのかも捨恵
又もしあの雪まよふくく
像すも吹そそうされ沖崖
みよしのうら書海士の約舟
生つく昔の尻のふ差さて
焼たの歌いの秋の世との
東神し里あくかなる峯
呂之節乃木乃中道
乃杜之ゆのする神の山ん
祈うふ書 宅ののりさ
こみをふろ潤きのるせき門
あいもさむてふ青海乃比
高れの毛橋小ち谷まで
青信渇し泉れ崖

津くのも蘭んの水の沐浴ん
田歌おしま近おゑ信川ぬれ
こもしを垣根の丹乃春やうふ、
まろ織りの明前よりて
無盤のいと御女月の露
まんつまるすのあて字文鏡
安見ぬるおふするる字鏡
阿たのうすって候ん
何やの山そとも有り人来ル
花ふ見割し言音野の夫、
ふるらふるまやすまさん
あまとて部さまへやすそする
甦の孫色浮もあまあふ
花そみるあの像子のこと

一向ニ宗の行末や判まて
はかられ千代も祈る言の葉
華寿も図生の竹の今もなく
うけれ天皇に辛の相良
こゝろみとめ丸一般の星の賞鉄
住の寺乃乃の名も形し
福よの尊もあるや隔つらん
施ゆまとく　出船人
まつ像の打立山乃あなさま
吉羽の里にも合社の雅
なつ乃あんてき雪と母なし桜花
とされゆのふいとし　氷日
津くとも恨を持ちて流色
別れなしかゝる京の都やけさ

堂能ほとり多く瓶川の峯
夏も流の名の古竃
也の浮かに涼しき乱
離の西の中に小舟指行
晴のあれやこの世々の蟋蟀
十川しも大きな入法の道
此あるも利て新やころぬらん
嵯峨の月の露も行けれ
花のさえも終しの花絶て
存ふ名もふさもから　の上
きりしす己の帝尊ふおもかな
すらをれのなきまとや
むかしなる讃の歌も古方の所
ちる浪のゆたは澄みてまれ

あさむつの風秋雲を隔かめ
て人々ミえ寺々遠き山の隔
日を三浦て東の宿儀の松
いろいろふうえる通り大一つれ
東雅ゝ又団子を投まはやちえ
いとやはらやの舞ふのさし
菜帯也屋花女子なひく
かゆきとくれなど諸所枕屋ん
流月を女ちら良る細のをの
若ふ宿所のさしあら待ち
この面ふ降ていかを連子人心
よい語のことまさもとえ
山も出たら仲ゆ東の今日の日ふ
将あまる乃多くの以ろく

むかしと吟る船の霧ゐん
水果ももうよの川　舟
若々岸ゝ　佐葉ハ猪かすわも
かま杉小家も信ハ信うく
沙人雁に食をたかの舟も何
翁の情もうすき月ゝの中
悩ま也んゝ侍ハたくふん
たとゑ見るもありれ石の世
みのふえぞ又つゝ杜若ゆめ
さ々里とそ見の末乃あぬ
桂　柿の紅葉の家の楽もえ
鴎帰中芦の宿とき古れ物
舞しき小雨もよしまる山居よ
草かゝ庵住のこえあらん

野梅は伊のうちもとく咲
まし
うらやまの中のゆかりにある
唐衣ぬれふのうきも何ふ今て
なきとの春はさそしふに出て
今て行山をかさなる言葉
立あらくも峯乃のはし
思ひのゆきのいちらんまへの風
八重に一声に雲乃梅の枝

第十
二字返音

松虫乃
二葉に千代の秋を示
春のめぐみも深き園生
月清き池の庭をうつして
みなぎはやかの舟を近づく
ここ文ひくるまるの枝きえん
音高し本乃か風
一木そちこさる花のかげみえ
走りまての日数まくなき

遠ハ此法をよきも也補すべし
筆路の旅の気をさし
おもよく其のうち屏風経験
思よひれも所をもいずれ
うき人をよそにしかと蜻蛉も
氣色の書き袖の香は
冬のよ時雨秋の空
當の庵の月みられのこし
柳蔭よい風にかすみ花も
初文庫一木のうき百
まおもやのきは海すつくらん
明離り行き乃大路
黒き友鳴の声して
山乃りつきそあへ離
あよふき床との空の晦す
秋も危くも空すてひの勘
以つりの本深き松の枝もそ
下やうつん書乃神風
あとのとえん居を保つよ
又きゆるのゆし庵乃おもかげ
二度も住之の遊ふかえて
大すみ名の包を取のし
忘れまいの月とも思しとはす
まんなよりみあても施
字らんなおもふ汁の鼓
誤れたらん岩間の字うれ
墓忠き山路ハ篠原の恋子冊子
岩のかゝ所も解き離まん

姥すて月ハしやたまん越の道
そこらふ山のいまさみ跡
すり坂や嵐の後ふ花輪
小松の宮えの葉をはなれ
旅人の袖かりし推をかて
陰とさしつゝすみ鶯
末をしけ深くもなお頼候事
れの御殿の香汁をさなる
うき深の二またあやうき川
梅の舞や夕方見事斯
九ノ露の花に吹飆 秋の路
先の月を度き古郷の月
霰しき月の奉を掃ひ旅の宿
さしはふ小松を世の中ほとし

春秋もやしましのよ眺めて
人の住もはな深き文山住
我のさき禍を見やなら郎公
秋をあそむもにや花も花なれ
とふ菊にさきそなむる心
飛ぬ根よ旅の香汁いと
酒みな屋住の衣深きをそ
昆やを深ふ行しつ住する
折くの秋の松風のけ
秋山の紅葉さく鈴ふ飛
到るも路邊の小高く鶏雛
よろ夫の廓の内をそまふん
月こう暁し ましの雨の更

海作の天橋や浪間にたちまよふ
引わたし風のおもかけうつすさ
見よと見れはふつゝか也浪に絶
切れはてし雪は下庵
しやすらひ諸浪に気をも何とも
力の月のえうみのくまん行末
足柄のむらすき文峰をまのひせ
横れ引りのえはうきまゝ
まとのふぬ晩鐘のひゝきを聞庵
名をさ川宇乎のうち山風
いのふかき夜の衣の袖のかれん
さやの月は紅の扉すき
花くゝとらは八人のとひきて
洞の色は松にそらうつりて

さくさくと相手の転の越錦き
され果つきしらぬ波るかや
進風沖安くい安し沖津舟
やすらそうそうゑみあさの
須磨や明石の浦ふところ
きよみか関る衆の袖
揺ら山かたむる宿の江の湊
難波津にすむものゝ乃色
蓮の池の面影のはる宮の
姥のたてふの梢かくちの
宇佐路の梢の苗の
との浦出る月のさやけき
のまゝやすらふ松の不二の雪
大江の月田子の浦

苗代の水を合にをさきおとし
わかやるの色のまへの一むら
さ濁る空あの雨まち合の汐て
杉の氷まし
明る風ものとけき山なれ
花の白雲
ともりの里そとも小径よふき
大君の恵にてふぬきすもなし
つもの道の像えこうき紀

廿八
文句

長夜乃
月を一雨来のころへの秋
外山の尾風清すも身れ入
わか庵にさえ軒の秋深し
只寒き色乃庭は黄昏
いつもの鳴く音もよしなき深
その日も海をいさ錦秋孫子
秋此の海芹の雨や氷るらん
余の色の雨そたゝよふ

旅の宿日数は道まかせ早も聞し
思ひかけたる都なりけり月
川ばたは花を見つゝ袖折らぬ
あの道をいくたび見る園の雨
袖もえて見ばかまのあつき
次はどこなりとあやなむき
言ふは何と徳の人やありけん
我ちかくありき山路かな
西方の神のまへにかけし数学
大そめの命もけり咲けば久し
今朝も神の浅茅の花種
いろいろ見た治も海ゆく
あけの雲さそふ沖は星の光
出るもの秋の夜のあはれ

大鳩のいつも番して来らん
深くもあはれなりそく
只見えしいのれとなくも風も
あのときありける路は夜の末
行人の神やまれと方なん
そてのかりも池の虫の音
空蝉の命その世はうつりて秋見て
おもひきる事もなきかなつかれ
仮祝の萩も此の月影
ゆめの暮しきの鳥の
かたしの草の中道に
最も深きつてさん三かね
抵もえつの飛鳥の都也
おもひもえすまいろるかのなさ

おもしろき家居ありて汐松
やさしきや兎原の松乃かげ
いさごまじりの井の水の清き
尼が崎にならび紀州の
くしや人家のかずおゝく
住よし住吉の里はさびしさ
昔を偲ぶ住吉の海の夕
跡なれしもとの流れなし
ときはなる汀の松の
市中に宮居の安みを
住吉の社の松の色や深
雨ふりて浄き遠里の
うち続く岸の花より
高き山さくら中の道

住吉の杜の春
昔ハ人の住む世や
潤ひぬ袖の花の枕
この所の文のあれ
月も曇るけき浦の風
たゝ煙深き
霞もや養農の島の
人をそ問わぬ先の古里
来まてや都もいまは
外面の田の面の村酒
つまとも乃うさし捨
出張の人の影も
西の果て国の
朝夕と眺むるに

太白のあまさもこきいさすさき
りんまし秋の歌を西風に
ありその波をも寄る
神ならむつきの夕日影
春霞のかぜの渡る風にて
川水遠く舟を橋に行
堅き御代の稲のしらん
またやかまり旗をしまはね
ますます作り田畑の種をまきて
うりもおほぬ道乃草の時
牧のうしかよりの数をしる
すゝむころひのはなのちらく
花に立隠れ鶯の種を知
ものすみぬ法のしらさ

廿の事を逃れて住む時
さまをも文机のかしこ文
今更ならねも讀の香を
潤ふするあのつくえの紙
さし柳のさしも別や惜しみ
坐て藤をうつしあかしまつ
うつし綿を植のかちを
あまとやつさえ死をおそれ
人毎に佛の國をと祈るに
月日をかさねのたちてくれ
ろのむと待れまちあまて
ならひたる梅乃初の花
徐雪も樹の雪に消の花
千代をなかの歌にて

安かつし　休の菴の翁
白河をしるしる所ほのしき
竹生島ありて見れ
ま度の跡やむの昔とひしや
あらしの小今ちる落木の月
尾達くも帰まうの身
沖津舟見えぬ波の淡
ゆきくしくるゆ顔にまちかし

かし
何袋

又やらん
風もえぬ水の下紅葉
うつりの尾花冬の福寿
唐衣うちきのほまるや
雑の名勝の月たけ斑し
秋まつ人我やいかなる草の福
落ちる涼し文夕さへあらはし
蛙の帰る押に木の瀬
白しや出の柳かくす

山寺遠く声も聞えん晩鐘
平らかに見る浦の帰る
人々の船も波ある舟の風を帆
以つて流しこゝろゆくの末
月の夜は風に知りせは秋の夜
松の枝も神の宮居に
世の秋のうちにかはらぬ夜や
勿論よりかはらぬ代々の
花よりも松にあふ洞庭
江に連れて行く風の落浪
行舟や流れも早き瀬田川
またつも強くなりきし
晴らし比良の山嵐も吹き見え
高根の雪の暮し

三井寺遠く雨の晴嵐
堅田しうりの声のすゞし
月の浦の夜を起きありて
きゝもの離の文字しき
雁かねよいつも秋の夜すがら
ともかくしもうきこのかな
聞えのはつれのむかふて
唐崎も松しまんときゝし
比の古るゆへよ湖舟
夕暮れや瀬田の暖夕山経
比叡の松は花よりあかん
粟津も打深いかしこの瀬
山の鳥ふきそを急ぎ八納る処
見ん人も今なる面影ハいつ

流りもすゝむ杭の爰迄に
淀の雨も溜りぬるゝや
鶯も舞りきた花の朝かく
於母の膳に来乃ゆ流
風吹ゝに友せんまた飛行荒て
この花し流のいきむしや外
虫の声よけるの車きこの小洞より
きくつとも足かけ月の秋
露汁るときえて晴るそのけむり
月んをよや都し萩乃一本
寝きもかゝる冬[illegible]有影ぶ
ゆきみとて八尾の山判
夕きよる人も絶たる坐の門
ふまへやまもこほる山法

小笠今　残もなくかぬ尾道
つれけみき竹の夕よ出るの分
隠密の道ふも雪の流れりて
同し秋に世をいとしけりん
灯乃影にうつるも墨の袖
わきれぬの法く仏のまへ
起わしも菩提の道に入るとかよ
まあしいはうさまゝ妙ときやう
うしとても何の新味の根しな
見[illegible]するの橋を渡く
むのしきえんに浦の顔かれ
雲の行来もきその梢の暮
手洗し流の山風月すてて
在と見ゆのか情は[illegible]し

暮るゝも秋をと惜れ給ふの京
たゝめ詠のまへあをつゝかし
小車の袖ちらくれ媚て
まつりよりそはふ衣 二月
君の代の星もちる 並山
語るえしき言もうち菜の道
路から瀬は花ましの影ゐ
眺るは花乃くさとみんよのかし
折にまよいそ翻める竹柱
ますの尾の月乃名高舟
川遠の名もの焼火継て
あめわいけの風のはふめの
夜ゐ来なみる翻るさいはも詠ん
ろゝ小案のふみゆる 山乃端

玉ゆつ白ふ宮より春のきて
四ツ紀ゝ海の翠波ぬ絢ぬ
二三月の小蝶の舞をとつて
風ふ跳らるきしこれのいと
くさやるとハ見りぬを乳と結ふけん
たのむ母ふかんのつまとと
いつのまさん 宵寒ふハうすき
さわりの雨の雲深きくれ
翔つる梢をふを吹や川ゐまし
名をとまりの里のつむら
山本の秋錦しきも又清き
明ちる山峯の月をさ落しな
さし挟し再ハ今日の汐の上
招き寄する二十日の潮風

すゝしさと小笹の露を堪出て
潤ふ如くに和らく旅のうさて
ゐ近き松もえらし我足
かわる旅路の末よりの留
白川の関の手ます(く)心離き
雲のかなたに一人の一津く
咲続く花や千もとの塩原
小松く松のこゝろ立色

三十

秋何

山とり乃尾上を君れのかけくに
月影ゆらする江流の玉水
音の秋の川添柳糸えて
涼しきまゝく一枝藤しも
折との風に笹やさらくらん
たゝみる峰の如く雲をむすひ
野竹のこゝろ小松の面影て
さゝつりこのり鳥の影

明ける陰陽の恵にあまり
はつむしの末乃山もと
は御手にも鳥や見ゆる分ひ乃
あれ色みえ葉の林に秋
かすむ身は香と花に清き
みえる月をかかち照らさん
問答ともとりと汁見れはや
住とも外の山の郎心
咲居さの花の花のは色さえ
春ふのこ草色よふりたな
ひまそや色と見ゆる花房
出 鍬は万代の坤の清き
秀く作たもぬ川のさされ
知さる作事 揚し 相撲の連

四葉の御汁入り田のさ流れて
之のし草の花き富の稲
込む土は地出や植ほふすくらん
催住居そとりん肉の組
ふ作み折り苗のそあれるれて
作く出ては入相乃のは
嫁早し 此身は頭も之ふ燈
何を鉄りのそしのかりけん
ふゝき草生の種も用ゆれ
一味の肉の恵ことあるまし
いふ年みけしや天の宣
さ 台の神乃分拓へしき
此のみれは又海て川をあふ
わ田をまく国のくすし 以上

山ハや高雄の道此つゝくらん
色ハ紅葉の里人
ころもも錦の衣のまゝとく
竹とも向ふつゝさん花匂
あの山のすゝさら泳ぎて瀬到り
うちまてあらく花の白まき
外道のひきし佐と頭ぶん
淀めの間のいろをしれるし
白山ハころ中の白ます
涼のきめ山と根てやろう
月み花ハ京ふ友なきに一仏変
山深まつて旅のうき雲
はきもえ咲めあふしの松かれ
おのれ花たる埋む出本

風流の末乃流くり
古今の能因法師もやさ
西行上人の根本しのいゝ斗
多らんとのの道まとめるや
採れ法も南の人の世ふ俗儒
心の外の根まさそなれ
我せさをましてや花の武恩
いのふ肝るしまつのゆふへそ
ありれもや生人命のうき命
聖地の岸の花おもしや小春日
経地の月かふ尾への山道で
くりり都の向の舟しくに
吉佐るかわらの上の松林
とふぬを深し人ふれの時

もよつも我身ハうきに流れて
見ハしとたよ見しより我身を
んのこひしとを我にうたふ
よそふえのみやかう婦の山
おもふ雪も嫁の縁ゆて
おも明も隠むまの明石
あすの之利すこ一生沖津船
影の今そこのくりのみにも此て
我さとし姉もさ出ていふ茶にめ
つさハ恵乃かるしおかりけり
こかしのんよ以つ袖のみさかん
明暮ロハとあふ六の字
忙つも母のる跡ハあのつ絶
生し一もらするも高のこし俤

まなハさそ萱ハ我をれ乱るん
明とも秋ハいのるも東屋
わ子の見も巌山そや乎神さる
うけ志保と又おもろのむしと云
めつ杜の見ハ露るとも一しみ子
誰あるふし 始手乃くをと
人をれ如我見のそとも我かはし
夏にふ手悲の影去さりけれ
りうくりのまそと以しハ何の意
あれいま世の涙さんうし
身出て今ハ宮世悲の縁原え
きなるれの信みのくれ家
けすものたけきも恋やを語らん
んくさら終武士のこゝ

九まふ追ふよまりの備りそ
けゝらぬ作りしそそきけ
にわや品等汁ちるふく
ひ自るきをば間の穴
急ぎそやくをさん窟のお
満汐まて出でし海母
浜まるふ天紅を濃の翅旦
貢ぬえふ一両代のみ房

諸のかんさく縁の色も
こめしるくされ
えその月下
客のこと此葉
昌逸
かく紅り
二番方当てまへ山田や

下山政常藏書

16